

みのおのおいたち その13

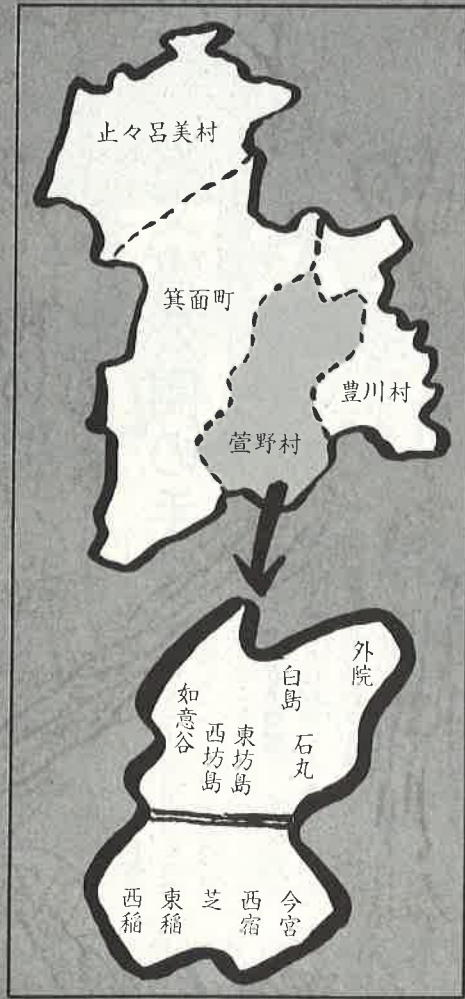
萱野地区(一)

市の中央部にある萱野地区は、江戸時代からの一一の村々が合併を行い、明治二年四月一日に誕生した萱野村が始まりです。地区の北部は山地で、山地南側の斜面は広びろとした山麓台

す。この萱野地区の歴史は、近年の遺跡調査などの結果、縄文時代に始まったことがわかってきました。稲や白鳥、如意谷の遺跡と遺物、例えば如意谷銅鐻な

って走る旧道は古代からの大路上で、京の都と西国を結ぶ山陽道、後の西国街道にあたります。平安時代の延長五年(九二七)につくられた「延喜式」を見ると、その道筋に「草野駅」が置かれ

に組み込まれた結果でしょうがその年次は不明です。それにしても、公領から貴族の私領にかわった萱野郷は、平安時代の末期になると春日神社の社領になりました。藤原氏が一族の祖先を氏神に祀った同社へ寄進したのです。今なお市域に所在している春日神社は、こうした歴史を背景にしてつくられたのでしよう。また、地区や旧村の名などもこの郷名を継承したのです。



地になっています。この台地には如意谷・東と西の坊島・白鳥・石丸・外院の集落があります。そして、台地の南側を通っている旧道沿いには、今宮・西宿・芝(現在の萱野)・東と西の稲の集落が続いています。地区を二分する形で南北に集落があるため、前者を北萱野地区、後者を南萱野地区と呼ぶこともありま

どがこの地区の歴史を伝えてくれます。また、北萱野地区の山中には、古代人の精神すなわち信仰を物語ってくれる巨岩や巨石があり、さらに、この地区内には延喜式内社の為那都比古神社、大婦天王社や大宮寺の旧跡もあり、さながら神々の世界とも形容できる土地柄です。一方、南萱野地区の集落を縫

っていたようです。また、和名類聚抄によると、一〇世紀ころの萱野地区は「駅家郷」と呼ばれており、このことから、集落が発達し、陸上交通の要所であったことが推測できます。こうした駅家郷にかわって出現したのが「萱野郷」です。駅家を含む郷域が拱関家の藤原氏という大貴族の荘園「垂水西牧」

の敬称で呼ばれるなど、郷内きつての有力者になりました。赤穂浪士の一人として知られる萱野三平はその子孫でもあります。三平の生家は芝ですが、今その長屋門が大阪府史跡に指定され、保存が図られています。次号からは、こうした地区の歴史を順に紹介します。